

一 日本文化の特性

1 日本文化の多様性

日本の文化には、どのような特性が認められるだろうか。その一つは、多様性であろう。もともと日常的な食文化をみても、和風・中華風・西洋風などが入りまじり、たいへんバラエティに富んでいる。しかも、今では日本独自の製品と思われるものでも、そのルーツを調べてみると、じつは外来品であるというようなケースが珍しくない。

身近な例でいうと、和食に欠かせない梅干の梅は、奈良時代以前に中国から伝わってきたものである。また天麩羅も代表的な日本料理のひとつとされているが、これは安土桃山時代に日本へきた南蛮人が伝えたものといわれている（異説もある）。

このように日本人は、中国のものであれ西洋のものであれ、かなり積極的にとり入

日本類聚再考

れてきた。しかも、日本人は、中国人が梅を塩漬けにするのを真似るだけでなく、それに紫蘇の葉を加えて漬けたあと、カラッと干し上げる日本独自の「梅干」をつくり出している。

また、ヨーロッパ（スペインあたり）から伝わったテンペロ（調理）に満足せず、植物性の油を使って何でも美しくサラツと揚げる日本独自の天麩羅を作り上げたのも、ほかならぬ日本人である。

さらに一例あげれば、戦後法制化された「国民の祝日」や古来の民間年中行事をも、幾多の要素がまぎって行っている。

- (1) 正月（宮中の四方拝・歳旦祭）や勤労感謝の日（戦前の新嘗祭）などは、もとも神道的な祭日である。
- (2) お盆（盂蘭盆会）や春分・秋分の日（彼岸会）なども、一見仏教的な行事であるが、本質は神道的な祖霊信仰の色彩が強い行事である。
- (3) 成人の日（元服・着裳）や敬老の日（長寿の算賀）などは、儒教的な発想の行事である。
- (4) 建国記念の日（紀元節）と天皇誕生日（天長節）と文化の日（明治節）は、戦前とくに「三大節」として重視されたものに基づいており、神道的・儒教的な性

格をあわせもっている。

- (5) 人日（七草）、上巳（雑祭）、端午（菖蒲）尚武）、七夕（星祭）、重陽（菊祭）の五節句（節供）などは、中国の民間習俗と日本の民間信仰とが一体化したものであるといえよう。

このような文化の多様性を、各時代の文化価値としてとらえ、各時代の文化的キワードを端的に示されたのは、もと東大教授平泉澄博士である。すなわち、古代（大和時代）には自然神道的な「純」なるもの、上代（飛鳥・奈良・平安時代）には造形芸術的な「美」なるもの、中世（鎌倉・吉野・室町時代）には仏教的な「聖」なるもの、近世（安土・桃山・江戸時代）には儒教的な「善」なるもの、近現代（明治以降）には科学的な「真」なるものが、おのおの重んじられてきたという指摘である（『史学雑誌』所載「日本精神発展の段階」）。

しかも、注目すべき点は、前の時代の文化的伝統が後の時代の文化的要素にもつぎつぎ取り込まれ、多様性を増してきたところに大きな意味がある。

事実、あたかも科学万能のような現代であるが、よくみると、神道的な自然を畏れる心も、仏教的な万物を慈しむ心も、儒教的な人倫を尊ぶ心も、多かれ少なかれ生きつづけている。